シリーズ

新北海道農業発達史の発刊を終えて 第二回

平成二五年五月十五日、新北海道農業発達史の主な執筆者の先生方にお集まりいただき、発刊後間もない現在の心境などをお話していただきました。

出席者（順不同、敬称略）

太田原　高昭　稲作、園芸作担当
黒河　功（司会）畑作担当
長尾　正克　畑作担当
飯澤　理一郎　園芸作担当
土井　時久　酪農担当
黒澤　不二男　肉用牛、肉豚担当
岩崎　徹　馬産担当

「新発達史」刊行のきっかけ

黒河　本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。

早速本題に入らせていただきますが、一点目は執筆作業を終えての現在の感想、手応え・反響、苦労話などをお話しいただき、その後、二点目として担当部門のベクトルとは何だったのか、三点目として、制約条件・問題点・懸念材料等を踏まえて、今後の北海道農業の可能性や期待することをお話しいただこうと思います。

まず、太田原先生には本シリーズの第一回の寄稿の中でも触れていただいておりますが、この「新北海道農業発達史」を書こうとした動機も含めてお話ししていただけますか。

太田原　私はかなり以前から我々の世代で「北海道農業発達史」第Ⅲ部を書きたいなと思っておりました。自分も暇になったし、仲間も大体取り組める体制になったし、なるべく現役に迷惑をかけたくないという思いもあったので、このメンバーに呼びかけました。同志の皆さんが快く引き受けてくれて、しかも全力投球していただいて、自分が思っていたよりもいいものができたなと感じております。改めて御礼を申し上げます。

反響ですが、発刊してまだ間が無いんで、読んでどうだったというのは一〇月過ぎ以降かと期待しております。大概は一〇ページ読んだよという段階で礼状が来るのですが、中には大河ドラマのように読めたよと言われ嬉しく思っております。

全体のコンセプトとして、北海道農業は

いろいろ辛かったんだけれども、基本的にはサクセスストーリーを書こうと何度も申し上げてきました。それこそが頑張ってきた人たちの努力に報いる方法だろうと考えておりました。

サクセスストーリーという観点からいうと、米はどん底から頂点まで這い上がったという非常にドラマチックなプロセスを経ています。優れた米の産地というのは特Aクラスを持っているということだけではなく、品揃えですね。トップクラスのうまい米をつくると同時に業務米から加工米、もち米、酒米までセットで揃える、卸が大型化するにつれてそういう注文が増えており、それに応じられるのが優れた産地であって、いつの間にか北海道はそういう産地になっていてその意味でNo.1ですね。新潟はコシヒカリに偏重しすぎており、高級米が余ってきて、一方で業務米とかに応じられないという偏頗な産地になってしまっているという反省があるらしい。

畑輪作確立の軌跡

長尾　畑作の執筆担当者は、小麦、てん菜、豆類、馬鈴薯ごとに担当者が異なりますので、私のコメントは黒河所長と一緒にとりまとめた総論に該当する「畑作の政策と構造」に限定させていただきます。

まず第一点の感想についてですが、私が学校を卒業し、北海道立農業試験場の経営部に就職したのが一九六四年ですから、今回の対象期間である一九六〇年から二〇一〇年の五〇年間のうち、ほぼ四六年間は私が北海道畑作と関わっていた期間ということで、当時私達が体験した畑作農業の実態を思い起こしながら楽しく筆を進めることができました。反響としましては、かなり不安でしたが大先輩や若手の一部研究者からは、身に余るねぎらいのお言葉をいただき、やや安堵しております。

第二点の畑作部門のベクトル問題です。現在北海道畑作の主要品目は小麦・てん菜・豆類・馬鈴薯の畑作四品で構成されております。畑作農家の作付体系は、歴史的には機械化の進展に伴い、経営の単純化によって、この四品の輪作による作付体系が形成されてきました。この畑作四品と一部緑肥休閑作による地力維持のための輪作を考慮すると、今後の畑作における家族経営の適正規模は、三〇ha～五〇ha規模で、これが北海道畑作のベクトルです。

第三点は、北海道畑作の懸念材料についてです。これはガット・ウルグアイラウンド交渉決着による、ガット農業協定の履行問題です。この協定によって、政府はこれまで輸入障壁や高関税で北海道産農産物を

長尾　正克

保護してきましたが、ガット農業協定により保護水準を低下させた結果、畑作農家の減少に歯止めがかけられない状況です。加えて、ＴＰＰ交渉に伴う農産物のさらなる輸入自由化が促進されれば、畑作四品による輪作体系が乱れ、畑作農業が崩壊する恐れがあることです。

黒　河　　畑作編のみ総論を設けたのは、農業経営の規模拡大と機械の大型化を意識しなければ畑作全般を理解できないだろうということでいれたのでした。

太田原　　今後、書評などで注目してくれるだろうと思いますが、一つは適正規模論です。

　耕作規模が一〇〇haとか一五〇haとかまできていますが、輪作が崩れてきており、せっかく確立した四年輪作がうまく回転するのは今の機械化段階では五〇haまでであって、一〇〇haくらいになると麦過作となり、輪作が崩れてきているというのは重要な指摘です。

園芸作興隆の背景

飯　澤　　園芸は一九七〇年代後半から急速に発展してきた軟弱野菜と花卉があり、今や野菜は米を抜いて生産額ではトップになった。北海道において、大規模化の流れの中で、超集約的な野菜生産が似つかわしいか否か、いささか疑問であった。他方、果樹は七〇年代までをピークに労働力不足、農薬散布のスプレーヤ以外ほとんど機械化されていないということで後退しており、対極にあるこの二つの分野を園芸と言うことで一括りにするのは大変な作業でありました。花とか野菜とかについては、とにかくデータがなく、過去については類推的な考察をせざるを得なく苦労しました。調査の過程で、園芸作についての研究者が少ないことも感じ、研究者を養成し、研究体制を作り上げていかなければならないと思いました。

飯澤理一郎

太田原　　米が良くなったということだけではなく、野菜を取り入れた複合経営の発達として押さえないと発展が見えてこないですよね。畑作酪農地帯においては、四年輪作から野菜を取り入れた五年輪作ということが言えるのかどうか関心を持っています。

大躍進酪農のこれからの姿

土　井　　我々は農基法以降から入っていったので、昭和二〇年から三五年までの土地制度については触れることができなかったのですが、とりわけ、北海道の特殊

事情としての農地改革については必ずしも整理されていないんじゃないかという気がして、今後、改めて研究する必要があるんじゃないかと思っております。

農村社会学の某研究者からは、目次を見て、農村社会の仕組みの変化についてはどうされたのかという指摘が寄せられたが、課題設定から外れているとしか答えられない。

私自身の感慨としては、北海道酪農はよくぞここまで来た、反面、撤退していった酪農家の皆さんの無念を感じます。

第二次構造改善事業で清水の舞台から飛び降りる気持ちで大投資をした農家の明暗が、オイルショックの前後で別れ、負債の負担が倍ほども違い、そのあたりをもっと書きたかったなという反省があります。

北海道酪農は国内では南北問題、国際的にはガット・ウルグアイラウンドの板挟みで足踏みを強いられてここまできたと改めて思います。

適正規模については、北海道の二一世紀酪農を明示できませんでした。搾乳牛一〇〇頭以上で家族労働での経営可能な機械化というのはまだ確立していない。搾乳ロボットは部分的に導入されているが、資本装備をどこまですればいいのか。現在の百数十頭規模を大きく超えられるのか。これはかなり難しい問題で企業的な酪農にとって替わり、二四時間搾乳になっていくのか。アメリカなどでみられるスーツケース・ファーマーが出てくるのかもしれない。いずれにしても好ましい姿ではないが、そんなものが浮かんでくるのが今の心境です。

土井　時久

系統事業展開と共に歩んだ

養豚・肉牛

黒澤　太田原さんの話で、やらんかと言われた時に私は積極的な賛意を表したと「地域と農業」に書かれていますが、実際は消極的な賛同の意を表したのです。というのは、当時、いろいろ事業を抱えており、後でやればいいやと軽く考えていました。肉牛と養豚二つ担当したのはかなり重く、肉牛だけ見ても乳雄と専用種ではかなり性格が違い、作目としては二つに相当し、後で後悔しました。

太田原さんが言った、歴史を書くということ自体の難しさを後になってひしひしと感じました。というのは全国と北海道の関係をどうするか、北海道は単独にあるわけではなく全国の中の構成要素でもあるし異質なものも持っている。それをどれくらいに割り振るか悩んだし、振り返ると未消化の部分もあるだろうと反省しています。

また、到達点をどこに置くか相当悩まされました。スタートは農基法からと決まっていたんですが、なかなか書き上げられないものだから期限がずんずんずれていき、その間、見逃せないエポックが次々出てきて、どこまで書いたらいいんだというジレンマに陥りました。

先ほどデータの話がでましたが、産地移動を表そうとしたら、市町村統計を平成一八年に国が止めたため、統計値の欠測に出くわし、苦慮しました。

豚も肉牛も個別農家の動きだけではなく、北海道では特に農協系統の事業展開と密接にかかわっているので、発達史は系統団体の業務展開史にかなり近いものになるだろうと着目し、それならホクレンの六〇年史、七〇年史、八〇年史、九〇年史をずーっとトレースしたら非常に通りのいいものができるのではないかと克明に読んだのですが、実はホクレンの年史も書く時期で書く人が違うので、ずうっと一本の線で繋がらないんですよ。それぞれ次元が違い、この辺も苦労した点です。

最後に、なかなか原稿書きに着手できず、だんだん追いつめられてきて、六ヵ月位前になって、真剣になって書きましたが、焦りが出て、帯状疱疹が出るなど辛かったですね。見直しを人に頼もうと思いましたが養豚の分野はあまり研究者がいなくて、肉牛は後になりわかったのですが東京農大の長澤さんなどが肉牛のブランド研究をやっており、相談したり入って貰えばよかったと後悔しています。また、畜産基地建築事業の失敗事例を七戸さんと共同で調査したことがありましたが触れることができませんでした。

黒澤不二男

土　井　　酪農を担当していたが、個体販売、乳雄肥育、乳肉複合経営をどうしたらいいか悩んでいました。

黒　澤　　その点で悔いはいろいろ残っています。

土　井　　根釧に乳雄仔牛の市場があって、価格が暴落すると酪農家が腹を立てて川に仔牛を投げて帰ってきた、という描写も欲しかったんですけどね

地域文化、他産業とのマッチが

馬産の課題

岩　崎　　正直、執筆を終えてホッとしています。そして書いてよかったと思っています。私は今まで、軽種馬や馬産地についていろいろ書いてきましたが歴史的に振り

返ってみると新しい発見がありました。

馬産を書けと言われた時は、軽種馬だけやればいいと思っていたのですが、農用馬を除くわけにはいかないと気づき、これは大変なことを引き受けてしまったと思いました。戦後、馬産は農政の対象から外れましたのでデータがないのです。それと、農水省や道庁にも農用馬の担当者は一人しかいない。統計上、農用馬の定義は時代によって変わり、一貫性がないのです。戦前には約一五〇万頭の馬がいたのですが、現在は約九万頭しかいない。戦前の農耕馬は家族も同然、軍馬はある意味人間より大事、そういう感じでしたが戦後は衰退の一途を辿りました。しかし全国的には、馬は急減したのですが、北海道においては、十勝ペルによって新しい畑作作業体系を作り、農用馬産は盛り返したのですよね。この辺は調べてみてすごく勉強になった点です。

次に出版してからの反響です。馬の関連団体や生産者への取材の過程で、『発達史』ができたら抜き刷りが欲しいという要請があったものですから私は抜き刷りを一五〇部作り送りました。今のところ約三〇人から手紙・葉書、メールで礼状を頂きました。農水省と道庁、特に日高などの振興局からは馬産地の将来をどうするかということに関する反応がありました。馬産を地域文化・地域産業として、他の産業とどうマッチさせるかという問題です。また、研究者や競馬ライターからの反響は、競馬と馬産地の関係を歴史的によくまとめてくれたというものが多かったですね。馬産地がこれだけ苦労しているのかということを初めて知ったという声もありました。

岩崎　徹

日本の軽種馬生産の特質をキーワードからまとめると、日高、家族、専業経営なのですよ。世界に軽種馬専門農協があるのは日本だけです。外国には農民経営、家族経営は少ないし、まして専業的にしかも自己馬中心に飼養している経営はない。外国のサラブレッド生産は基本的に道楽や趣味で、競馬は、イギリスは貴族の、アメリカはブルジョワの遊びであり、日本は大衆競馬です。東京などの全国の競馬ファンが馬産地を訪ねてくるという文化は日本にしかない。その日高が馬産地として特化し、モノカルチャ経済になったため、モノカルチャ経済の弱さが二一世紀になってもろに出てくる訳です。それと関連して、書き終えて感じたことは、馬産は農業経営なのか、企業経営なのかということです。家族経営中心に広がった軽種馬生産が、今や社台グループというマンモス企業を出現させ、対照的に日高家族経営が衰退した。しかし、日本競馬の発展に日高・家族経営の果たした役割は大きい。減反を機に日高地方に馬産地、馬産経営ができて、日本の馬産が質・量と

も発展し、世界に冠たる日本競馬を作ってきた、その礎を作ったのが日高家族経営だった。僕が軽種馬研究を始めた三〇年前の日本は競馬二・三流国だった。今は間違いなく一流国です。内部に格差を抱えながら一流国です。

先程来の適正規模という観点から、軽種馬経営も家族経営の良さがどう生かせるのかが課題です。企業経営と比べたら、資金力、情報力で劣るのは違いないのですが、家族経営が地域的に協同・協調して新しい産地を作る必要がある。ところが、日高の人たちは身の丈を超えた企業経営を追いかけているのですよ。今後の日高は、モノカルチャ経済を打破して、如何に地域の産業・文化と結びつけて地域的に多角・複合経営として組織化、六次産業化するかにかかっていると思います。以上です。

規模拡大と今後の土地利用のあり方

黒　河　岩崎先生のお話にあった馬産についてのキーワードは、家族経営であったとしてもモノカルチャではなく複合経営だと示唆していただきましたが、他の分野の方はいかがでしょうか。また、太田原先生からお願いします。

太田原　畜産のお三方に共通していたのは、「家族経営と企業経営の間」という問題ですよね、今専門家たちの農業の中心課題も家族経営、戦後自作農はもう駄目で、これからはもう企業だ、そこに絞って支援をしていくという話になっており、一番規模を拡大してきた北海道農業をまとめたわれわれがそこからどういう問題を提起するかでしょうね。

黒　河　畑作では四作で輪作が確立されたという話でしたが、これで固定化されたという意味合いではなく、これからの展開方向として先ほど野菜を絡めた五作という話がありましたが、むかしの野菜作のようないわゆる小規模に囲い込んだ園地を、土地利用展開における本流である一般畑作による耕地利用にミックスするには工夫がいると思いますが、北海道は今、家族経営と企業経営の間にいるというんですけど、さらに規模拡大が予想される土地利用から言えば、いずれにしても複合化・組織化というのをいかに具現化・イメージ化することが課題になると思います。

黒河　功

太田原　家族経営云々というのは問題が大きすぎるんで、その前に、輪作の問題ですが、この前ドイツに行って、ドイツの輪作がどうなっているのか聞いたんです。ちょっとびっくりしたんですけど、小麦、大麦、とうもろこしなんです。全部穀物で問題が出ないのと聞いたら、問題が出たら休閑ということでした。普通は三作で回している。改めて北海道はすごいなと、全部役割がある訳でしょ。イモとビートは寒冷地作物で冷害に強い、麦はクリーニングクロップで雑草を除き、豆は窒素肥料を提供するという役割があり、一巡するたびに地力が増す。世界的に見ても素晴らしいと思いますが、十勝型の輪作がどのように位置づけられ、評価されているのか。昔は農法論が盛んだったけど、今はないですね。

黒河　イギリスの輪作の原型は小麦、大麦、赤クローバー、カブさらにその上に酪農畜産がのっかっています。耕種と畜種が合わさった形にまでなっています。北海道ではそのちょっと手前で、畜産という作目が残っていますよね。一〇〇ha規模の畑作は長尾理論ではそれは無理だという話であれば、五〇haは三作あるいは四作の畑作物として、残りの五〇haは休閑でいくしかない。休閑だったら勿体ないから畜産がくっつくべきだと思います。一戸の農家で完結できるかどうかは分からない。地域的複合・組織型農業になるのか、長い目でいろいろなイメージとして考えられるじゃないかなと思います。

太田原　ＴＰＰ問題でテレビの解説でも輪作をいうようになった。農業の内部結合というか合理性の追求があって、市場条件だけで判断されるのは困るというのを、国

民的常識として定着させなければならないと思うんですね。そういう意味では、非常に大きな問題提起をすることができたのではないかと思っています。

長　尾　　ビートは収益性が落ちてきていて、生産性も変わっておらず、長芋を取り入れるとなると作業時期が重なり、重労働ということもあって、作付けが減少傾向にあります。そういう意味で輪作の危機となっています。

今後の野菜作の展開について

黒　河　　畑作は苦労しながら機械化に乗る形でやってきたが、一方で野菜は北海道ではどうなのかと思っていたら、今や売り上げではでかい柱になった。野菜にもいろいろ種類はあるけれども、北海道での野菜作の可能性、限界という点ではどうですか？

飯　澤　　経済的に非常に大きな作物になりましたが、一方で農家経営が全体的に規模拡大に進んでいるので他の作業と兼ね合いを持ちながら野菜作作業をやっていかなければならないのがかなりネックになってきているような気がするんです。一方では企業型で野菜専作経営が確立しつつありますが、他方では、出面が枯渇する中で、労働力が不足してきています。仕方なく、派遣に頼りますが、派遣は一定しない。作業工程をすごく細かく分割して、例えば除草するグループ、外の作業のグループなどと分割し、それぞれのグループに経験者をつけてやろうとしますが、なかなかうまくいかないと言う。大規模経営は労働力的な面から懸念せざるを得ない状況にもあります。

長　尾　　畑作の経営に野菜を入れるというのは、作物の組み作業に人数を確保しなければいけない、しかもかなり手練れの人夫さんを集めようとすると常雇に近い待遇をしないと確保できないので、その人たちのために仕事を作らなければならないんですよ。今まで家族の労働力で足りていたものが、婆ちゃんができなくなったとかで労働不足が生じたため、労働を固定化しなければならない。そのために野菜が入ってくるというケースがかなりあります。

黒　澤　　畑作経営が野菜を導入するのと野菜作経営が一般畑作をつくるのと境目はなくなってきています。選択すべき作目として割り切って考えているだけだと思います。野菜の場合は、露地野菜を人参などのように大規模にやるか、より集約的なハウスの作型を細かく区切った形で手間はものすごくかかるが、単位当りの収益を上げるものに特化するグループに分かれるんじゃないでしょうか。

飯　澤　　請け負っているのは建設会社で、冬場の除雪が主な仕事なんですが、除雪ってものすごい熟練労働なんですね。このオペレーターを確保しておかなかったら困るの

で農作業の請負が夏場の就業の場となっているんですね。

展開の鍵となる労働力調達

太田原　そういう形で、地域経済の中で労働力問題が解決していくということが展望として言えるでしょうか。

黒　澤　葉物とか軟弱野菜などは、パートタイマーをシステム的にメンバー登録をしてフリータイム制で上手く回転させているところもありますね。

太田原　酪農の場合は中国の研修生を何人確保するかで規模が決まるということがあるんですね。

土　井　家族労働力プラス不足分をどう確保するか調べたかったんですができませんでした。

一五〇頭以上の搾乳牛となってくると農業実習生二人から三人を実質的低賃金、常雇労働力として抱えています。これがいつまで続くかは見当がつかないです。

太田原　そういう労働力の供給が切れて、野菜みたいに地域循環の中でやっていくとしても賃金水準は全然合わないですよね。

長　尾　地域循環型が断たれてきており、それをもう一回構築することが可能なのだろうか？

黒　澤　賃金水準の話だけど、一般企業の農業参入の話があって地域農研でコントラクターなど労働力派遣の調査したことがあったんですよ。それでどうしてもうまくいかないのは土建業と賃金水準が合わない。土建業がこれだけ不況業種になってもまだ農業より高い。この賃金ギャップがある以上、絵にかいたような農業と他産業が連携してなどということはできないんですよ。

太田原　これはシンポジウムじゃないんだから結論は出さないまでも、こんな大きな問題が出てきているよときちんと記録に留めておきましょう。研究者をもっと増やす必要がありますね。

北海道の担い手の存在状態について

太田原　担い手の面でいうと、今回自分で一つの発見だったんだけども、農業労働構成でいうと、全国的には明らかに昭和一桁を頂点にするきのこ型なんですが、北海道はきれいな壺型で、団塊の世代とその次の世代が残っているんですね。団塊の世代

太田原高昭

はまだ六〇代だし、その次の世代はまだ五〇代だし、たぶんまだ二〇年は大丈夫なんですよ。ところが全国的には昭和一桁がもう働けないもんだから、どんどん担い手がいなくなってくる、離農を引き受ける営農集団化だ、企業型だという流れになってきて、農業理論もそうなってきている訳ですよ。それに引きずられることはない、本来の農業はこうだと言っていいと思うのですがいかがですか？

黒　澤　　農業者年金でいうと六五歳定年という考えが定着しているが、個人レベルではまだまだいけるという人も中にはいますが…。

太田原　　ジャーナリズムも含めて全国的に言われているのはもう担い手がいない、ＴＰＰがある無しに関わらず日本の農業は先細りだと、そういうことばっかり言われる訳ですよ。

皆でその気になっちゃったら困る、少なくとも北海道は違うと言ってもいいんじゃないかなと思います。

これからの北海道農業の戦略

土　井　　全体を通して読んで感じたのは、二一世紀になるとはっきりしてくるのはブランドということですよね。今までの農業は作りさえすれば、後は農協が売ってくれるという気軽な農業経営だったものが、米は米で北海道のブランドにのって作らなければ駄目だし、十勝黒豚だとか豚肉もそうだし、酪農の場合ではもう少し工夫のしようがないのかなと思います。

黒　河　　ＴＰＰで言うと、北海道農業は専業農家ですから一番厳しいという話になる、一方で政府はそれでは援助するという話を言っているみたいですけど、いずれにしても北海道の農業というのは直接的に世界と向き合うことになる。同時に今度は内需の話になると南北戦争の再来ですよね。牛乳なんかはどうなるんですか。

土　井　　遂に都府県は三〇五万ｔ、北海道はこれを上回る三二七万ｔになりました。北海道は曲がりなりにも生産調整をやりながら、まだ伸びています。都府県は明らかに一九九〇年以後は下り坂という状況で、輸送とか流通を北海道農業はきちんと考えなければならない。農家の手にあまる問題で、農家の組織としてのホクレンの課題です。例えば、前に飯澤先生と調べたんですけど、カスミソウのような安いかさばるものを東京市場に持っていくとなると、輸送の工夫が重要です。そういう工夫は消費地に遠い北海道が国内市場をどれだけ確保するかの問題です。よくホクレン丸を第二まで作ったなと思います。

太田原　　飲用乳の内地送りは紳士協定なんですよね。内地の酪農家を護るために不足分だけを送っている。ところが、乳製品が完全自由化となったら紳士協定も何もな

く、ホクレン丸を一〇隻くらい作って、どんと持っていく以外に生きる道がなくなるわけですよ。そしたら内地の酪農家は完全に潰れるでしょう。多分ね、我々が止めろと言ってもやると思うんですよ。

長　尾　　ただね、向こうの酪農家は北海道からずいぶん牛を買っているんですよ。持ちつ持たれつの関係があるんです。

黒　澤　　遺伝資源の国際化のボーダーレスも大きいですよね。日本が最高のものを作ったって、向こうが安い労働力で作ってこられたらひとたまりもない。

北海道農業の潜在能力について

黒　河　　時間もきてしまいましたので、北海道農業の今後の展開について岩崎先生いかがですか。

岩　崎　　農業は農業である、農業生産のシステムは工業とは本質的に異なるということ、農業は地域産業であるという二つのことを大事にする、ということに帰結するのではないでしょうか

黒　河　　私達今回の仕事でそれぞれ担当者はサクセスストーリーを書くつもりでいたんですけど、その通りにならない部分もありましたが、今直面しているのはＷＴＯどころか急転直下ＴＰＰという話になりまして、それでも北海道農業の可能性に言及するとなれば、ベクトルは過去においてどうだったか、今後どうなのか示しておきたいと思うのです。太田原先生、お願いします。

太田原　　いろいろな夢を語ってもＴＰＰが来たら全部潰れてしまいます。無責任なことを言う人が世の中に一杯いて、内地は米さえ守れば米と野菜で食っていける。北海道は飲用乳に切り替えて、十勝は野菜を作れば何とかなるでしょうみたいなことを言うんですよ。私はそういうことを言う人には北海道を甘く見るなと、内地は野菜で食っていけると言ったって、十勝が野菜を作ったら野菜価格は暴落しますよと、飲用乳に切り替えて、ホクレン丸を一〇隻くらい作って本格的に送ったら内地の酪農は壊滅しますよ。北海道はそのくらいの力を持っているのは間違いないんですよ。アメリカが攻めてくる前に北海道が攻めていくよと言っているんです。北海道がＴＰＰ絡みで生きるために紳士協定も何もかなぐり捨ててやったら、被害は全国に及ぶよ、それだけの生産力を我々は持っているということを言わなければならない。北海道農業を今の適正規模に縛るためにいろいろなことが必要になるんじゃないかということを逆説的に思います。

黒　河　　本日はありがとうございました。